

会 議 議 事 録 (抄)

会 議 名	2022年度専門学校東京テクニカルカレッジ 第二回インテリア系教育課程編成委員会
開 催 日 時	2022年11月25日(金)15時40分～17時00分
会 場	専門学校東京テクニカルカレッジ 地下1階 テラホール/9F 904 教室
参 加 者	<外部委員:3名> (順不同・敬称略、役職は委員名簿参照) 小山 誠之 (株式会社パワープレイス プレイスデザインセンター教育・公共デザイン部 部長) 島田 祐輔 (apgm デザインアトリエ/法政大学大学院デザイン工学研究所 兼任講師) 鈴木 俊恵 (STeam/一般社団法人 日本インテリアコーディネーター協会 東京圏支部) <内部委員:2名> 高山 寿一郎(専門学校 東京テクニカルカレッジ インテリア科科长 議長) 村田 涼 (同 インテリア科 書記)
	<第二部 系別分科会>15:40～17:00 9階904教室 1. 議長挨拶(高山) 2. 前回(系別分科会)議事録の確認(村田) 3. 資格試験に関する報告 4. 学習成果展示に関する報告 5. 二つの学び・複合人材に関して 6. 次回予定・閉会の挨拶
討 議 内 容	3.) 資格試験に関する報告 【高山】 ①インテリアコーディネーター学科試験 昨年が2年生6名、1年生2名 に対し、今年は2年生3名、(昨年2名の計5名) 1年生0名 =19.2%の合格率 履修判定試験と1次学科試験のスケジュールが被っている為タイミングの調整を次年度は行いたい。次年度からCBT方式の受験となり受験日に一ヶ月程度の幅を持ちテストセンターで受験する方式と予想される。 ②2年生福祉住環境コーディネーター3級試験 昨年72%今年度前期時点で4/26名(うち1名は2級)の15%、補講を実施し、現在後期受験期間中だが合格者がなかなか出ない状況。問題の出題形式が昨年度からIBT方式のテストに変更されたこともあり、難易度が安定していない可能性が高く、70点が合格ラインの試験だが、回によりレベルにばらつきがあり合格率も異なることと、今年の2年生の学力が低いということは特にない為、今年度の試験の難易度が高かった可能性もあるが、対策や分析が必要。 ③1年生色彩検定3級は22/28名合格の78.5%(昨年度は96%)、不合格者の6名中4名がBE科からの留学生,日本人2名(1名未受験)こちらも不合格者は後期受験に挑戦している。 4.) 学習成果展示に関する報告 【高山】 1年生は個室のコーディネート作品、2年生は2世帯住宅の設計/コーディネート作品を展示。全員が楽しく作品を作り提案が出来ている印象。 【島田委員】(2年生作品指導教員) 全体としてグラフィックススキルは1年生の作品から見てもかなり高いものがある。専門学生としての技術力があるので考え方の部分をブラッシュアップしていく為、2年生作品ではダイアグラムでコンセプトや空間を図式化して説明するなどそういった部分を重点的に指導した、理解力も高く良く出来ていた。図面関係もかなりブラッシュアップできている。 【高山】 今後も二世帯住宅の計画をしていこうと考えているが、やり方に改善点はありますか？ 【島田委員】 紙面に対して図面を小さくしてしまいがちなので平立断の図面専用のボードを用意し、プレゼンボードとしてグラフィック的に表現する図面と分けるようなフォーマットを用意するのもいいかもしれない。

【鈴木委員】

作品を見ると誰に対してのプレゼンテーションするのかよく理解できていないように感じる、実際に仕事になればクライアントの条件/希望に対して提案をするので必要なものが分かり、伝える相手に合わせた提案が必要になる。

【小山委員】

綺麗に出来ているが、プレゼンテーション自体が先生向けになっていて前提条件を知らないで見ると説明不足などを感じてしまう。

【高山】

学生は先生に対してプレゼンするという意識を強く持ってしまうかもしれません。
1年生のうちからクライアントにプレゼンするという考え方を持つように意識付けをしないとイケないですね。

【村田】

二世帯住宅課題のタイミングがインテリアコーディネーターの学科試験と重なっていて辛いという意見が学生から寄せられていて、うまくバランス良くやっていくために何かご意見はありませんか。

【小山委員】

試験は大事だけどどのタイミングでやっても何かしらの課題と重なる、仕事はマルチタスクで行う為、大変でもやっていくことは必要。

【島田委員】

マルチタスクといえば課題は同時並行でいいのかもしれない。1期のパターン演習からそのまま続けて敷地調査などを開始し、2期3期の課題を伝えて先のイメージを持たせ、前期の最後に次の課題を開始してゆとりを持たせつつ作業する、先に目標の課題を伝えてから練習のパターン演習をスタートしていくような形。いきなり課題を渡すのではなくグラデーションを付けて備える姿勢を作ってあげる流れが必要。

【高山】

カリキュラム改正というより組み換えや微調整が大事かもしれない。
技術面は身に着いているので、考え方の方面を伸ばしていきたい。大学と比べ受動的な学びになってしまいやすい環境だがRJPなどのおかげで自分で調べ学んでいくという癖、力がついてきている面もある。

【島田委員】

4期の最初に行っている提案でも、ヒントから自分で調べつつ膨らませて提案に盛り込んでくれる。ここ数年は課題の意図を汲んで新しいライフスタイルの提案のようなことも出来ている。
RJPでクライアントベースの提案をしているので、商業施設は自身の作品として個性を出した提案をしても良い。

【鈴木委員】

ここ数年の卒業制作では、学生なんだからもっと自分が面白いと思うことに挑戦してもいいのではと思うことがある。
自分が興味をもってやりたいことをやる機会は学生の間しかほとんどないので挑戦してほしい。自分で考える、調べるという力にも繋がる。

【島田委員】

1年生も2年生も喋るスキル、プレゼン能力が高くなっている、与えた時間以上に話してしまう人が多く、発信することに慣れている。
質問に対してちゃんと自身の考えやアイデアを説明出来るなど、教えることが身に着いている。大学は優秀者のみ発表ということが多いが、全員に発表の機会があるというのがプレゼンなどの力に影響しているのかもしれない。

5.) 二つの学び・複合人材の有用性に関して

【白井校長】

パワープレイス様ではインテリアデザイナー、Webデザイナーの方々がいますが、その二つを学んだ人材に必要性はありますか？

【小山委員】

それぞれ別の人材になっていて、両方を持つ人材が必要ということはない。コンテンツの為の知識があることは有効で活用できる可能性はある。
両方が出来る人材は必要ではないが、軸がありプラスで別分野の知識があり共通言語でそれぞれの分野を繋ぐことが出来る人材は有用。だが 2 つの技術を学んでどちらも考えが浅くなってしまふなら厳しく言えば不要。

・前回の会議後にメールで頂いたご意見に関して

【鈴木委員】

たくさん科があるという強みはあるが、複数の分野の全てを知る必要はあまりない。自分の軸となる分野+他分野の入口程度の知識があれば良い。オールマイティに出来る人が欲しいということではない。知識を付けようとして学ぶのではなく、興味があるから学ぶことが良い。その分野に興味があれば強みがある人材になる。

【島田委員】

どの分野との複合でも強みはある。いつどこでどんな分野と繋がり、関連付くか分からない。他分野と協働の際に知識があれば共通言語で分野間の通訳のような人材になれる。学生にとっていきなり他分野への興味を持つことは難しいのでその下地となるきっかけを作る必要性がある。他分野への興味作りとして例えば

・学生版未来会議

→それぞれの分野・学科がどのようなことをやっているのか紹介する

・学生同士のプレゼン

→学生が他学科学生へプレゼンする。作品展示なども含め他の分野を知るきっかけ

・選択講義

→他学科の講義を選択肢受講できるような仕組み

【高山】

学校の2Fでインキュベーションセンターの構想があるのでそこでプレゼンや講義をするというアイデアもあるかもしれません。

【小山委員】

インキュベーションセンターは一般の起業家を入れるものですか？卒業生ではなく。

【高山】

卒業生もいいですね。

【島田委員】

大学のデザイン工学部では3学科合同でデザインフォーラムという、デザイン関連の外部の方の話を聞く会がある。関連分野ではあるが自分が知らない話を聞き、学ぶ機会となる。テクニカルカレッジは校舎に多分野があるのでそういった機会があれば刺激になる。

【高山】

カフェを発展させて2Fの図書室の活用など構想があるので今後RJPなどで計画があるかもしれません、その中で学習の幅を拡げていくようなことが今後起こるかと思います。

6.)次回日程と閉会の挨拶

【高山】

今回は会議ではなく、学習成果報告会としてテラホールで発表会を行う予定となっております。日程等改めてご案内させていただきます。